D-6

語構造の観点から見た広東語フットの考察

陳　凱僑
神戸大学大学院
chenkaiqiao0426@gmail.com

要旨

中国語の共通語である普通話は、語彙の半数以上が 2 音節で構成されており、単音節語はそれほど多くない。加えて、普通話では 2 音節構造が句ではなく語として認識されやすい。そのため、普通話では音節を単位としたフット構造がしばしば提案されている。本研究では中国語諸方言のフット構造を考察することを視野に入れながら、広東語の語構成における音節数の制限とフット構造を考察する。離合詞に注目して 2 音節構造の文法的ふるまいを普通話と対照した結果、普通話では「語は少なくとも 2 音節を有する」という傾向性が強く働くのに対して、広東語では単音節で語を構成する傾向性が強く、2 音節構造だと語ではなく句と分析されやすいことを指摘する。以上の結果を踏まえ、広東語のフット構造はモーラを単位とすることを主張する。

1. 普通話のフット構造

中国語の共通語である普通話の語彙は 2 音節性の強い傾向を持つ点が先行研究の注目を集めている。具体的には、この特徴は主に 2 つの側面に反映されている。【1】普通話の語彙の半数以上が 2 音節で構成されている（荘ら 2018: 7）。【2】普通話では 2 音節構造は統語的に独立して使用可能であるのに対して、単音節形態素は単独使用に対する制限が多い（呂 1963）。

荘ら（2018）はこれらの特徴を整理した上で、普通話の最小語は図 1 で示すような音節を単位とするフット構造、即ち音節フットであると提案した。

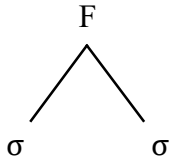

図 1．普通話のフット構造：［（σσ）F］Word（荘ら 2018: 39-40，σ：音節、F：フット）

図 1 のようなフット構造の提案は以下のような解釈に基づく。【1】普通話は音節構造がほとんど開音節であるため、音節量が軽くなっており 1 音節だけでは 2 モーラを包容することが不可能である。【2】普通話では 2 音節構造が 1 語と認識されやすい。【2】の現象に関しては 2 音節の動介構造（「動詞＋前置詞」構造）の一語化が例示されている。

（1）普通話の 2 音節構造「動詞“躺 tǎng”＋前置詞“在 zài”」の一語化[1]（荘ら 2018: 125）

a. 張三　　**躺**　**在**　沙發　上　「張三はソファーに横になる」
Zhāngsān　tǎng　zài　shāfā　shàng
Zhangsan　lie　at　sofa　top

[1] 本稿が引用した文例のグロス付けは原文で付与されていない場合はすべて筆者が付した。なお、引用した文例は原文で簡体字やピンインで表記されていても、本稿では一律繁体字表記に変換することにする。

b. 張三　　**躺　在　了**　沙發　上「張三はソファーに横になった」
Zhāngsān　tǎng　zài　-　le　shāfā　shàng
Zhangsan　lie　at　-　PFV　sofa　top

例文（1a）では太字で示す“躺在 tǎngzài”が動介構造である。（1a）の文に完了相標識の“了 le”を加えると（1b）の文になる。荘ら（2018: 125）によると、普通話では完了相標識は動詞に直接に後続するのが一般的であるにもかかわらず、（1b）では“了 le”は動詞“躺 tǎng”ではなく動介構造“躺在 tǎngzài”の全体に後続している。この現象は、動詞“躺 tǎng”と前置詞“在 zài”が 1 つの動詞として組織されていることを反映すると荘ら（2018: 125）は指摘した。このような統語的に独立した 2 つの単音節要素の一語化について荘ら（2018: 125）は、普通話における［（σσ）Foot］Word というフット構造が語構成の韻律テンプレートとして働いたため、「動詞“躺 tǎng”＋前置詞“在 zài”」の 2 つの単音節の組み合わせが 1 語として認識されたのが原因であると述べている。

このように荘ら（2018）は「普通話のフット構造は音節フットである」という提案に基づきながら、普通話における 2 音節構造の一語化などの言語事象を分析している。では、普通話の韻律構造は中国語諸方言にも適用できるのだろうか。そこで本研究では普通話と対照しながら、広東語の語構成における音節数の制限および 2 音節構造の文法的ふるまいを考察する。

2. 2 音節構造の文法的ふるまいから見た広東語のフット構造

広東語は、中国広東省、香港とマカオなどの地域に分布する中国語の方言である。まず注目したいのは、普通話に比べ広東語では語の単音節性が強い点である。邵ら（2018: 104）が示した「普通話（2 音節語）vs. 広東語（単音節語）」の語彙の例を整理した表を示す。

表 1. 普通話と広東語における語の音節数の対照（邵ら 2018: 104，英訳は筆者）

英訳	普通話	広東語	英訳	普通話	広東語
stone	石頭	石	interest	利息	息
bone	骨頭	骨	force	力氣	力
table	桌子	枱	color	顏色	色
neck	脖子	頸	pocket	口袋	袋
daughter	女兒	女	clothes	衣服	衫
duck	鴨子	鴨	know	知道	知
hole	窟窿	窿	easy	容易	易
ant	螞蟻	蟻	habit	習慣	慣
banana	香蕉	蕉	rude	蠻横	蠻

表 1 を見ると普通話における多くの 2 音節語は、広東語では単音節語に対応することが分かる。さらに、普通話の拘束形態素の多くは、広東語では自由形態素となる。例えば普通話では“石”は“頭”などの接尾辞と結びついてはじめて語としての地位を有するが、広東語では“石”は単独で語として使用可能である。

また、普通話では 1 語と認識された 2 音節構造の多くが広東語では句と分析される傾向が見られる。例としてまず 2 音節の動介構造の文法的ふるまいに注目したい。上記の（1b）の文を広東語にすると（2）のようになる。

（2）完了相標識“咗 jó”は広東語の「動詞“瞓”＋前置詞“喺”」構造の間に挿入する

張三　瞓　咗　喺　梳化　上「張三はソファーに横になった」

Jeūngsāam　fan　-　jó　hái　sōfá　seuhng

Jeungsaam　lie　-　PFV　at　sofa　top

（2）が示すように、普通話の“躺在 tǎngzài”と対応した広東語の動介構造“瞓喺 fanhái”は、完了相標識の“咗 jó”の挿入による構成素の分離が可能である。つまり、普通話の「動詞＋前置詞“在 zài”」構造では内部構造の分析が行われず語の性格を有しているが、広東語「動詞＋前置詞“喺 hái”」では一語化が進まず句と分析されていると解釈できる。

動介構造に加え、2 音節の動補構造（「動詞＋補語」構造）でも広東語は普通話よりも句と分析されやすい。例えば、高（1980: 49-50）が指摘したように、“出去 chūqù/cheūtheui”などの「動詞＋方向補語」の 2 音節構造は、普通話（3a）では完了相標識の挿入による構成素の分離が不可能であるが、広東語（3b）では分離が可能である。

（3）普通話と広東語の「動詞＋方向補語」構造と完了相標識の組み合わせ方（高 1980: 49）

a. 普通話：完了相標識の“了 le”は「動詞＋方向補語」構造の全体に後続する

他　出　去　了「彼は出て行った」

tā　chū　qù　-　le

3sg　out　go　-　PFV

b. 広東語：完了相標識の“咗 jó”は「動詞＋方向補語」構造の間に挿入する

佢　出　咗　去「彼は出て行った」

kéuih　cheūt　-　jó　heui

3sg　out　-　PFV　go

（3a）と（3b）においても 2 音節構造は普通話では一語化が進んでいるが、広東語では構造内部の緊密度が低く句と分析されていると解釈できる。このような動補構造の内部の緊密度の違いも両方言間の韻律構造の相違を反映する可能性がある。

さらに、普通話において 2 つの構成素の順序が固定している 2 音節複合語は、広東語では並び方が定着しにくく句に近いふるまいをすることが多い。構成素は同じだが順序は異なる 2 音節構造は、中国語学では「同素異序語」と呼ばれる。黄（2001）は、西洋の宣教師 W. Lobscheid が 1871 年に編集した *A Chinese and English Dictionary*（以下、*C. E. D* と言う）に記録された広東語の「同素異序語」を現代の広東語、普通話と対照し、広東語では「同素異序語」の構成素の並び方が最終的に定着するまで構成素の順序は入れ替え可能であると指摘した。黄（2001）による例の一部を表 2 に示す。

表 2. 普通話・*C. E. D* 広東語・現代広東語の一部の「同素異序語」の対照（黄 2001）

英訳	普通話	*C. E. D* 広東語	現代広東語
to agree with	符合	符合	合符
because	因為	因為	為因
have already	已經	已經	經已
culinary vegetables	蔬菜	蔬菜	菜蔬
swing	鞦韆	鞦韆	韆鞦

現代広東語でも表 2 の“合符”“為因”“經已”“菜蔬”“韆鞦”という 5 つの「同素異序語」は、現代広東語では順序が逆になるような言い方があることを筆者は確認した。このように構成素の順序が定着しにくい「同素異序語」の存在も広東語の語の特性を考える際に重要な知見を与えてくれる。

以上のような特徴から、広東語の語構成は普通話とは異なる原理に従うことがほぼ明らかである。しかし、語構成に注目して広東語のフット構造を議論した研究は管見の限りでは存在しない。そこで本研究では、これまで見てきた「語の単音節性が強く保持されている」という広東語の特徴に注目し、広東語はモーラを単位とするフット構造、即ちモーラフットを有すると主張する。

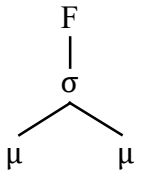

図 2．広東語のフット構造：［(μμ = σ) F］Word（μ：モーラ、σ：音節、F：フット）

以下では、この主張を裏付ける新たな証拠として離合詞の目的語の後続許容度の方言差について本研究が独自に行った考察を説明する[2]。

3. 広東語の離合詞の目的語の後続許容度に関する調査

3.1. 離合詞について

中国語には、「離合詞」と呼ばれる「動詞＋目的語」の 2 音節から構成される語彙クラスが存在する。離合詞には「目的語が直接的に後続することを制限する」という重要な特徴がある。この特徴に関して王（2018）は、「動詞＋目的語」構造を持つ離合詞は既に 1 つの目的語を持ち、意味的にも完結しており、それ以上目的語を直接に後続させるべきではないと指摘している。しかし一方で、普通話では離合詞に目的語を後続できるという用例が一定程度観察されている。例として “關心 guānxīn” ‘involve-heart = be concerned about’ という離合詞に目的語を後続する文を（4）に示す。

（4）目的語（下線で示す）を後続できる離合詞の例（Li & Thompson 1981: 79）
我　很　　**關　心**　<u>他</u>「私は非常に彼のことを気にかける。」
wǒ hěn guān-xīn tā
I very concerned 3sg

離合詞に目的語を後続できる現象は、離合詞が一語化して内部構造の分析が行われなくなったことを反映していると董（2011: 186）は指摘した。本研究では、広東語の離合詞も普通話と同様に一語化が進んでいるのかを考察するために目的語の後続許容度について調査を行った。

3.2. 調査方法

3.2.1. 調査協力者

調査協力者は 20 代女性の広東語母語話者 3 名である。内訳は広東省広州市・香港・マカオの出身者各 1 名である。

[2] 音節構造についても広東語がモーラフットを持つことに矛盾は生じないが、本稿では説明を省略する。

3.2.2. 調査語

中国で出版された離合詞辞典《漢語常用離合詞用法詞典》（周 2011）に収録されている離合詞 268 語をもとに、普通話で目的語が後続可能な 33 語をコーパス調査を通じて抽出し、調査語とした。調査語は表 3 で示す。

表 3．調査語の 33 語

保密	報名	貶值	操心	插嘴	擔心	點名	定性	發愁	放心	掛鉤
還原	加工	加熱	減產	留神	留心	留意	露面	埋頭	命名	起草
傷心	伸手	生氣	提名	問好	下令	獻身	消毒	行賄	宣誓	增產

3.2.3. 調査手順

調査語の 33 語を 3 名の調査協力者に提示し、広東語においても目的語が後続可能かを調査した。広東語においても目的語が後続可能な場合には例文を 1 つ作成してもらい、筆者がそれらの文に基づき、目的語が後続可能かどうかを再確認した。

広州広東語・マカオ広東語のデータは 2021 年 7 月（一部は 12 月に追加収集）に、香港広東語のデータは 2021 年 12 月に収集した。調査は遠隔の質問紙アンケートで行った。

3.2.4. 調査結果

調査が使った普通話の離合詞の 33 語のうち、広東語においては‘發愁’と‘生氣’の 2 語が日常的に使われないため考察対象から除外した。残りの 31 語に目的語を後続できるかどうかを調査した結果、広州広東語・香港広東語では 18 語が目的語を後続可能であり、マカオ広東語では 9 語が目的語を後続可能である。結果は表 4 に示す。

表 4．目的語を後続可能と 3 名の調査協力者が判断した離合詞の語数（調査語 31 語）

広州広東語	香港広東語	マカオ広東語
18	18	9

次に、調査協力者の 3 名全員・2 名・1 名が目的語の後続を許容した離合詞および 3 名全員が目的語の後続を許容しなかった離合詞をそれぞれ表 5、6、7、8 にまとめた。各回答の具体例を（5）に示す。

表 5．調査協力者 3 名全員が目的語の後続を許容した広東語の離合詞（9 語）

番号	広東語の離合詞
1	報名 bou - míhng ‘inform - name = sign up for’
2	擔心 dāam - sām ‘carry - heart = worry about’
3	還原 wàahn - yùhn ‘return - original = move…back to’
4	加熱 gā - yiht ‘add - heat = heat up’
5	留心 làuh - sām ‘hold - heart = be careful about’
6	留意 làuh - yi ‘hold - intention = pay attention to’
7	起草 héi - chóu ‘up - draft = draw up’
8	提名 tàih - mìhng ‘mention - name = nominate’
9	消毒 siū - duhk ‘exterminate - poison = sterilize’

表 6．2 名の調査協力者が目的語の後続を許容した広東語の離合詞（5 語）

番号	広東語の離合詞	各母語話者による目的語後続可能性の判断（○/×）		
		広州	香港	マカオ
1	操心 chōu - sām ‘operate - heart = worry about’	○	○	×
2	放心 fong - sām ‘put - heart = feel relieved’	○	○	×
3	加工 gā - gūng ‘add - work = process’	○	○	×
4	下令 hah - lihng ‘give - order = give orders to’	○	○	×
5	行賄 hàhng – kuí ‘behave - bribe = pay bribes to’	○	○	×

表 7．1 名の調査協力者が目的語の後続を許容した広東語の離合詞（8 語）

番号	広東語の離合詞	各母語話者による目的語後続可能性の判断（○/×）		
		広州	香港	マカオ
1	保密 bóu - maht ‘keep - secret = keep…secret’	×	○	×
2	插嘴 chaap - jéui ‘insert - mouth = get a word in’	○	×	×
3	點名 dím - míhng ‘point - name = name sb. name’	×	○	×
4	定性 dihng - sing ‘decide - nature = label…as ’	×	○	×
5	減產 gáam - cháan ‘reduce - output = reduce output of’	○	×	×
6	命名 mihng - mìhng ‘assign - name = name sth’	×	○	×
7	獻身 hin - sān ‘dedicate - body = give one’s life to’	○	×	×
8	增產 jāng - cháan ‘increase - output = increase output’	○	×	×

表 8．調査協力者 3 名全員が目的語の後続を許容しなかった広東語の離合詞（9 語）

番号	広東語の離合詞
1	貶值 bín - jihk ‘reduce - value = depreciate’
2	掛鉤 gwa - ngāu ‘hang - hook = link up with’
3	留神 làuh - sàhn ‘hold - spirit = keep an eye on’
4	露面 louh - mihn ‘show - face = show up’
5	埋頭 màaih - tàuh ‘bury - head = throw oneself head into’
6	傷心 seūng - sām ‘hurt - heart = be sad for’
7	伸手 sān - sáu ‘stretch - hand = step into’
8	問好 mahn - hóu ‘ask - good = say hello to’
9	宣誓 syūn - saih ‘declare - pledge = pledge’

（5）表 5-7 で示した各回答の具体的な文例（離合詞は太字、目的語は下線で示す）

a. 全員が後続可能と回答：**報**　　**名**　　<u>考試</u>「試験に出願する」
inform - name examination
bou - míhng háausi

b. 2 名が後続可能と回答：**操**　　**心**　<u>呢　件　事</u>「このことを心配する」
operate - heart this - CL matter
chou - sām nī - gihn sih

c. 1名が後続可能と回答：保　　密　呢　個 消息「このニュースを秘密にする」
keep - screct this - CL news
bóu - maht nī - go siūsīk

3.2.5. 分析と考察

前節の調査結果を踏まえつつ、普通話と対照しながら広東語における離合詞の目的語の後続許容度について考察しよう。表4を見ると、広州広東語・香港広東語では調査語31語のうち約58%を占める18 語で目的語を後続可能であり、マカオ広東語では約29%に当たる 9 語で目的語を後続可能であることが分かった。普通話では 31 語全てで目的語を後続可能なため、広東語では離合詞の目的語の後続制限がより強く働くことを確認できた。

次に、表5-7を見ると広東語離合詞31語のうち、調査協力者3名全員が後続可能と回答した語数・2名が後続可能と回答した語数・1名が後続可能と回答した語数はそれぞれ9語（約29%）・5語（約16%）・8語（約26%）であった。一方、表8を見ると3名全員が後続不可能と回答した語数は9語（約29%）であった。別の観点から分析すると、少なくとも1名の調査協力者が後続可能と判断した語数は22語（約71%）と半数を超える一方で、1名・2名が後続不可能と回答した語数も合わせて13語（約42%）あり、3名の母語話者の中でも判断に揺れのある語がかなり多いことが分かる。

以上のような広東語の離合詞に見られる目的語の後続に対するより強い制限は、広東語の離合詞が普通話よりも1語と認識されにくいことを示唆しており、「2音節で1単位（普通話）vs. 1音節で1単位（広東語）」のフット構造の相違を示していると筆者は考える。

4. 議論と今後の課題

本研究は、「普通話のフット構造は音節を単位とする」という荘ら（2018）の解釈が中国語諸方言で通用するのかを考察する第一歩として、広東語のフット構造にアプローチした。動介構造・動補構造・「同素異序語」などの 2 音節構造の文法的ふるまいだけではなく、離合詞の目的語の後続許容度に関しても両方言間に違いが存在することが確認されたが、これらの相違は普通話では語と認識されやすい2音節構造が広東語では句と分析されやすいことを反映している。以上の証拠から、広東語のフット構造は普通話と同じような音節フットではなくモーラフットと提案したほうが妥当であると筆者は考える。

今後の課題として、「広東語のフット構造はモーラを単位とする」という主張に対するより多くの側面からの検証と広東語以外の中国語方言での追加的な考察が必要である。

＜参考文献＞

Lobscheid, W. (1871). *A Chinese and English Dictionary*. Noronha.
Li, C. N., & Thompson, S. A. (1981). *Mandarin Chinese: A Functional Reference Grammar.* University of California Press.
董秀芳 (2011) 《詞彙化：漢語雙音詞的衍生和發展（修訂本）》，北京：商務印書館。
高華年 (1980) 《廣州方言研究》，香港：商務印書館。
黄小婭 (2001) 廣州方言異序詞的百年演變，《廣州大學學報（綜合版）》第 15 巻第 7 期。
呂叔湘 (1963) 現代漢語單雙音節問題初探，《中國語文》第 1 期。
邵慧君，甘于恩 (2018) 《粵語詞彙講義》，香港：商務印書館。
王　俊 (2018) 《現代漢語離合詞研究》，長春：東北師範大學出版社。
周上之 (2011) 《漢語常用離合詞用法詞典》，北京：北京語言大學出版社。
莊會彬，趙璞嵩，馮勝利 (2018) 《漢語的雙音化》，北京：北京語言大學出版社。